

## ルカによる福音書2章21-38節 「あらわになる心の思い」

### 1A マリアに与えられたしるし

1B ガブリエルの受胎告知

2B 羊飼いたち

### 2A 慰めの約束 21-35

1B 貧しい家庭 21-24

2B シメオンの預言 25-35

1C イスラエルの慰め 25-27

2C 万民の救い 28-33

3C 人々の反対のしるし 33-35

3B エルサレムの贖い 36-38

## 本文

今朝、みなさんと共に読みたい箇所は、ルカによる福音書 21 節から 28 節です。すべて読んでみましょう。

### 1A マリアに与えられたしるし

聖書には、いろいろな人の心のうちが描かれています。今読んだところには、イエスの母、マリアに対しての心が多く語られているのに気づかれたかと思います。35 節にはシメオンが、「あなたが自身の心さえも、剣が刺し貫くこととなります」とまで言っています。

ところで、母親の子に対する思いというのは、いろいろなことを物語ります。彼女の息子に対する心と思いは、あまりにも一筋なので、息子の人生そのものが、その心の鏡に映し出されるかのようです。父の心も息子にあります。その心はあまり見えてきません。しかし、母は違います。自分の胎から出てきた子には、自分の心が注ぎだされるため、彼の人生そのものが見えてくるのです。

聖書には、例えば、箴言の最後の章には、レムエルという王の母が、「私の子よ、何を語ろうか。私の胎の子、何を語ろうか。」という言葉から投げかけて、女たちに思いを費やすことへの警告、それから強い酒を飲まないことなどにも注意し、そして、「しっかりとした妻」について、賢い妻を見つけることについて語っています。そこで、マリアの心を見ていくと、そこに主イエスご自身のことが見えてくる面があります。

### 1B ガブリエルの受胎告知

彼女は、ダビデの家系のヨセフの、いいなずけになっていました。その時に、天使ガブリエルがやってきて、彼女が懐妊することを告知します。もちろん、ヨセフとの間に関係がありません。その

子が、イスラエル人が待ち望んでいるメシア、すなわち救い主であることを伝えます。

処女が身ごもることについて、ユダヤ人にとって真新しいことではありません。紀元前八世紀に、預言者イザヤを通して、主ご自身が、救いをもたらすしるしを与えると伝えられていました。「イザヤ 7:14 それゆえ、主は自ら、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を生み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」このインマヌエルとは、「神がともにおられる」という意味で、処女から男の子が生まれることで、その子が神であるのに人となったことを意味しています。神が人となる方が救い主、キリストなのだということです。マリアは、ガブリエルの言った言葉に対して、素直に応答します。「ルカ 1:38 ご覧ください。私は主のはしめです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」と言います。そして、マリアは、「1:46 私のたましいは、主をあがめ、私の霊は私の救い主である神をたたえます。」という賛美の歌、賛歌をうたいました。

## 2B 羊飼いたち

そして、ローマ皇帝アウグストゥスが、帝国のすべての住民に対して、住民登録をするようにという勅令を出します。それで、ヨセフはダビデの末裔ですから、ベツレヘムに行きます。身重のマリアもいっしょです。ベツレヘムで、家畜小屋、といっても、家畜のいる岩穴ですが、そこに泊りました。その時に産気づいて、イエスが産まれました。飼葉桶に布でくるんだのです。

それを、大きなしるしをもって、マリアに知らせました。ベツレヘム郊外にいる羊飼いをとおしてです。彼らが夜番をしていた時に、主の使いが来て、救い主、キリストが来たことを告げました。飼葉桶に布でくるまれているのが、しるしだと言いました。そして、天の軍勢がやってきて、一斉に賛美したのです。「2:14 いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和が、みこころにかなう人々にあるように。」これを見た羊飼いは、主が示してくださったことを見に行こうと言って、マリアとヨセフのところに来たのです。

そして、2章 18-19 節に、こう書いてあります。「聞いた人たちはみな、羊飼いたちが話したことに驚いた。しかしマリアは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。」マリアは、ただ驚いただけでなく、すべてを心に納めていました。そして、思い巡らしたのです。みなさんが、今朝、聞いておられることについて、ただ、ここで反応するだけでなく、すべてを心に納めて、思いめぐらしていただけることを願います。

## 2A 慰めの約束 21-35

そして、先ほど読んだ箇所になります。

## 1B 貧しい家庭 21-24

<sup>21</sup> 八日が満ちて幼子に割礼を施す日となり、幼子の名はイエスとつけられた。胎内に宿る前に御

使いがつけた名である。

ユダヤ人には、神のおきて、律法が与えられていて、八日目の男の子の、男性器の包皮を切除する、割礼を施す日になっています。そしてその時に、ヨセフにも、マリアにも、天使に告げられていた名、イエスなのだと言われていたので、名付けました。

イエスという意味は、「主は救い」です。人々が、神に背いている罪から救われる必要があります。すべての人は罪を犯しています。神に対して犯しています。そして、その罪は自分で取り除こうとしても、もう自分の一部になっています。それで、神は救い主、キリストを遣わすことを決められました。イエスという名のとおり、この方が、罪を取り除くために来られました。

<sup>22</sup> そして、モーセの律法による彼らのきよめの期間が満ちたとき、両親は幼子をエルサレムに連れて行った。<sup>23</sup> それは、主の律法に「最初に胎を開く男子はみな、主のために聖別された者と呼ばれる」と書いてあるとおり、幼子を主に献げるためであった。

これもまた、ユダヤ人たちが守っている、おきてです。女は子を産むと、男の子については四十日、汚れているとみなされます。その期間が終わったので、エルサレムにこの子を献げようとしています。これも、律法の中で、初めの男の子は主のものとなるためとあるので、それで、神殿にまで来て、この子を主に献げするために来たのです。

<sup>24</sup> また、主の律法に「山鳩一つがい、あるいは家鳩のひな二羽」と言われていることにしたがって、いけにえを献げるためであった。

主に献げるいけにえは、牛や羊でした。けれども、牛や羊を献げる経済的な余裕がない人々、貧しい人々には、鳩のいけにえも、主が受け入れることが律法にあります。つまり、ヨセフとマリアは、貧しい家庭であったことが分かります。

今でこそ、クリスマスは世界中でお祝いされ、盛大に祝われています。イルミネーションは、とても光り輝いてうつくしいです。けれども、真のクリスマスは、そういったところにはなく、たった一人、孤独になっている人々の、ちょっと薄暗い部屋にあるかもしれません。あるいは、今月の食べ物に困っている、母子家庭のところにあるかもしれません。なぜなら、キリストは、このような貧しい家庭の中に生まれたからです。私たちが、疎外されていると感じているところに、自分は、クリスマスにふさわしくないと考えている人こそ、クリスマスが来ていると言って過言ではないのです。

## 2B シメオンの預言 25-35

### 1C イスラエルの慰め 25-27

<sup>25</sup> そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい、敬虔な人で、イスラエルが慰

められるのを待ち望んでいた。また、聖霊が彼の上におられた。<sup>26</sup>そして、主のキリストを見るまでは決して死を見ることはない、聖霊によって告げられていた。<sup>27</sup>シメオンが御霊に導かれて宮に入ると、律法の慣習を守るために、両親が幼子イエスを連れて入って来た。

シメオンという老人が、イスラエルが慰められることを、ずっと待ち望んでいたとあります。これは、同じく預言者イザヤが、預言したことです。「イザ 40:1-2 「慰めよ、慰めよ、わたしの民を。——あなたがたの神は仰せられる——エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その苦役は終わり、その咎は償われている、と。そのすべての罪に代えて、二倍のものを【主】の手から受けている、と。」」これは、イスラエルの民が、神に背いてバビロンに、捕え移されたことが背景にあります。彼らが、罪、咎を犯したのですが、その彼らに対して、慰めよ、慰めよ、との呼びかけがあるのです。そして、咎が償われて、二倍のもの、つまり罪の赦しによる、神の恵みを受けなさいと言っています。それを、「イスラエルが慰められる」と言っているのです。

私たち一人ひとりにも、慰めが必要ですね。罪が赦されるという慰めです。

### 2C 万民の救い 28-33

<sup>28</sup>シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。<sup>29</sup>「主よ。今こそあなたは、おことばどおり、しもべを安らかに去らせてくださいます。<sup>30</sup>私の目があなたの御救いを見たからです。

シメオンは、幼子イエスを見て、「私の目があなたの御救いを見た」と言っています。救われるというのは、どういうことでしょうか？それは、単に天国に行くことでしょうか？そうではありません。この方自身が、救いそのものです。この方にあつて、罪が赦されて、神につながるができるというのが救いです。

<sup>31</sup>あなたが万民の前に備えられた救いを。<sup>32</sup>異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの栄光を。」

ここにも、イザヤの預言が反映されています。神は、キリストについてこう語られました。「42:6b あなたを見守り、あなたを民の契約として、国々の光とする。」イスラエルの神であり、救い主なのですが、イスラエルの民だけでなく、国々の光にもなったださっているのです。当時、ユダヤ人たちは、ユダヤ人であれば救われると信じていました。だから、ユダヤ人でない人々、異邦人は、ユダヤ教に改宗すれば救われると信じていました。けれども、そんなことは、主は言っていない。すべての人に備えられた救いなのです。異邦人にも与えられた光なのです。

<sup>33</sup>父と母は、幼子について語られる様々なことに驚いた。

ここでも、両親は驚いています。母のマリアにとっては、三つ目のしるしです。一つは、御使いが

ブリエルによる受胎告知。まだ処女であった時に、そう語られました。次に、羊飼いたちが見た、主の使いからの言葉。そして天における天使の軍勢の賛美です。それから、ここです。シメオンの預言が、驚くべきことでした。

### 3C 人々の反対のしるし 33-35

しかし、次のシメオンの預言が、マリアの心を突き刺したことでしょう。

<sup>34</sup> シメオンは両親を祝福し、母マリアに言った。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れたり立ち上がったたりするために定められ、また、人々の反対にあうしるしとして定められています。<sup>35</sup> あなた自身の心さえも、剣が刺し貫くことになります。それは多くの人の心のうちの思いが、あらわになるためです。」

イエスは、イスラエルの慰めとして来ました。この子に、救いがありました。国々の光であり、イスラエルにとっての栄光です。しかし、この子のことについて、イスラエルの中で真っ二つに分かれるのです。ある人々は、この方を通して神に立ち返るのですが、多くが倒れてしまいます。そして、反対します。それは、福音書を見れば書かれてあることです。

私が、バイブル・カフェなどで、イエス様のことを伝える時、実にいろいろな反応があります。そこで興味深いのは、それぞれの人々が、自分たちの反応が最も正しくて、標準的だと思っていることです。自分の考えを、他の大半の人たちも抱いているだろうと思っています。けれども、実は、自分自身だけがそのことを思っていて、イエス様については、それぞれが実に異なる反応をします。

<sup>35</sup> あなた自身の心さえも、剣が刺し貫くことになります。それは多くの人の心のうちの思いが、あらわになるためです。」

これは、マリアの心のことです。彼女は、イエス様が反対を受けて、ついに、ユダヤ人に捕えられることになります。そして、愛していた息子が捕えられ、裁判にかけられ、そしてついに、十字架につけられることになります。彼女の心は、剣が刺し貫ぬかれることになるのです。十字架にはりつけにされている時に、主は、母とヨハネそれぞれに語られました。「ヨハ 19:26-27 イエスは、母とそばに立っている愛する弟子を見て、母に「女の方、ご覧なさい。あなたの息子です」と言われた。それから、その弟子に「ご覧なさい。あなたの母です」と言われた。その時から、この弟子は彼女を自分のところに引き取った。」主が十字架につけられていた時に、このような会話ができたほど、至近距離にいました。彼女の心には、剣が刺し貫かれたようになっていたのです。

そこで、なぜそんなことになるのか？「多くの人の心のうちの思いが、あらわになるため」ということです。闇の力が覆うと、人々の心のうちの思いがどんどん明らかになります。今の時代が、そのようなものです。光が照らされると、その人の心の思いが明らかにされます。罪を行う人は、ます

ます行うようになります。善を行おうとしている人は、ますます善を行います。イエス様に触れると、それぞれの心が明らかにされて、それで、ある人は悔い改めて、神に立ち返ろうとしますし、その他の人は、これまでにはない反応を取るのです。それを間近でみなければいけないことは、とても辛いことです。人々がこんなにも反対するのかと、

今、この時代に人々の心が試されています。これまでは、それほど、人々の違いは表面的には見えませんでした。けれども今の時代、だんだん明らかにされています。世の終わりは、愛が冷えると、主は語られました。まさに、今の日本の社会、人々の苦しみに対して、まるでその人たちが悪いことをしているかのような見方を平気でします。ここまで、日本人は冷たかったのか？と思ってしまう。

イエス様は、世の光です。先ほど異邦人たちの啓示の光とあったように、です。聖書では、光は善、正義、清さを示していて、反対に暗闇は、罪や不法を表しています。ユダヤ人の間では、この時期に、ハヌカーというものを祝います。神殿奉献祭、あるいは宮清めの祭りと呼ばれます。その時に、燭台にろうそくの灯を点ける、点火するのですが、闇に輝く光を意味しています。イエス様も、ハヌカーに参加されていました(ヨハネ 10:22)。イエス様は語られていました、「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して罪の中を歩むことがなく、いのちの光を得ます。(8:12)」

しかし、光のうちに歩む者たちは、闇がさらに暗くなろうが、むしろ、光が輝くのです。世において、大きな悲劇、苦しみがあっても、人々はむしろその時に、善を行うことができます。ますます、闇の中で光り輝くのです。

### 3B エルサレムの贖い 36-38

<sup>36</sup> また、アシェル族のペヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。この人は非常に年をとっていた。処女の時代の後、七年間夫とともに暮らしたが、<sup>37</sup> やもめとなり、八十四歳になっていた。彼女は宮を離れず、断食と祈りをもって、夜も昼も神に仕えていた。<sup>38</sup> ちょうどそのとき彼女も近寄って来て、神に感謝をささげ、エルサレムの贖いを待ち望んでいたすべての人に、この幼子のことを語った。

シメオンのように、神殿で主に仕えていた女預言者がいました。彼女が、同じようにして幼子のことを語ります。彼女も、エルサレムの贖いを待ち望んでいました。エルサレムの贖いとは、再びエルサレムが神のもとに取り戻されることを意味します。この方によって、エルサレムも贖われます。主が戻ってこられて、エルサレムを回復される時があるのです。

いかがでしょうか？ イエスがお生まれになったというのは、人々にチャレンジが与えられていたのです。世に光が来たのです。皆さんの心には、光は来ていますか？